

Title	二次受傷に関する実証的研究 : 犯罪被害者を支援する人々を対象にして
Author(s)	大澤, 智子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44831">https://hdl.handle.net/11094/44831</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	大澤智子
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第18085号
学位授与年月日	平成15年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	二次受傷に関する実証的研究—犯罪被害者を支援する人々を対象にして—
論文審査委員	(主査) 教授 三木 善彦 (副査) 教授 藤岡 淳子 助教授 西澤 哲

### 論文内容の要旨

外傷体験を扱う支援者(臨床家やボランティア相談員)は、被害者と同じ体験をしていないにも関わらず、被害者と同様の外傷性ストレス症状、燃えつき、世界に対する認知の変容、精神保健への影響が起こると考えられている。このような現象は二次受傷と呼ばれ、1980年代から欧米において研究されてきた。

わが国においても1995年の阪神・淡路大震災や地下鉄サリン事件以降、幼児虐待防止法、ストーカー法、配偶者からの暴力防止及び被害者保護に関する法律などの成立に伴い、トラウマやPTSD(Post Traumatic Stress Disorder: 外傷後ストレス障害)という言葉が社会的にも広く知られるようになった。このような変化は、犯罪被害者に対する支援活動や臨床家がトラウマ体験をしたクライアントを扱う機会を急激に増やした。しかし、外傷体験をした被害者と共感的な関係を持つ支援者や臨床家はどのような心身状態に陥るのか。また、深刻な二次受傷を負った支援者は、どのように回復し、その過程を助ける要因は何なのか。また、予防策にはどのようなものがあるのか。これらの問いに対して答えを出すためのデータは、わが国にはない。しかし、今後、被害者の支援活動やトラウマを抱えたクライアントの援助を行なう臨床家やボランティア相談員が増え、支援者が二次受傷に陥る可能性も増えると考えられる。支援者の精神保健を維持することは、被害者やクライアントに対して質の高いサービスを提供するために不可欠なことである。

本研究では、トラウマ体験を持つ人に支援を行うことで起こる二次受傷の実態と症状に影響をもたらすと考えられている要因との関係を検討し、二次受傷からの回復および予防の可能性について示唆を得ることを目的としている。研究1では、これまでの先行研究の議論を踏まえて、5つの説明要因を選択し、以下の仮説を立てた:

- 1) 現在のストレスレベルと二次受傷症状の程度には正の相関がある
- 2) 活動頻度と二次受傷症状の程度には正の相関がある
- 3) 活動環境の安全感と二次受傷症状の程度には負の相関がある
- 4) 支援活動へのサポートと二次受傷症状の程度には負の相関がある
- 5) 過去の個人トラウマ体験と二次受傷症状の程度には正の相関がある

そして、支援者の精神保健状態および二次受傷の度合いを測定する尺度を用いて、上記の仮説を検討することを目的とした。同時に、支援者の二次受傷への耐性要因についても検討することを目的とした。

加えて研究2では、個別面接調査を実施し、臨床家が体験する二次受傷の影響を現象学的に捉えると同時に、二次受傷からの回復過程、二次受傷への耐性、または予防に寄与する要因を半構造化面接で明らかにすることを目的とした。

最後に、これらの検討を通して、支援者のための二次受傷予防プログラムの基礎を構築する。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では二次受傷の概論について述べた。二次受傷の定義、研究の歴史を記した。また、これまで欧米で行なわれた二次受傷研究のレビューを行ない、二次受傷をもたらす可能性があると考えられる要因をまとめた。

第2章では支援者の二次受傷の実態を把握するため、全国で活動する被害者支援団体の支援者を対象に質問紙による調査を行った。使用尺度は、General Health Questionnaire 28, Traumatic Stress Institute Belief Scale, Maslach Burnout Index, Impact of Event Scale-Revisedの4種類で、それぞれの尺度で心身状態、代理受傷（認知の歪み）、燃えつき、そしてPTSD症状を測定した。結果：仮説1は支持されたがそれ以外の仮説は支持されなかった。既存のストレスが二次受傷への耐性に影響を与えていることが示唆された。また、活動頻度が低いほど「他者信頼感」における認知の歪みが大きいことが示され、経験の少なさが二次受傷の症状を悪化させる可能性を示唆した。過去のトラウマ体験がある人の方がPTSD症状を多く体験する可能性が示唆されたものの、「自己信頼感」ではトラウマ体験者の方が認知の歪みが少ないことが示唆された。また、各尺度の結果は、支援者は二次受傷を体験しているがその程度は臨床的な介入を必要とするほどではなかった。これは、わが国における支援活動の歴史が短いことや調査対象がボランティア相談員であったことが影響を及ぼしているようだ。また、各尺度間には相関関係が見られ、とくにTSIは他の尺度との間に比較的強い相関が見られた。これは、二次受傷を包括的に把握する際に有益な尺度となり得ることを示唆しているのではなかろうか。

第3章では女性臨床家を対象に半構造化面接を行い、質問紙調査では把握できなかった二次受傷の具体的な側面に光を当て、耐性要因や予防策を検討した。臨床家はさまざまな二次受傷を体験していた。PTSD症状は再体験、回避、覚醒亢進症状が報告され、安全と信頼に関わる領域で認知の歪みが起こっていた。また、二次受傷への耐性要因は、「相談相手の存在」「臨床家としての自信」「加害者との接点」「希望」や「成育環境」があがった。安全やコントロール感の確保が耐性要因となる可能性を示唆している。また、予防策は、「分かち合える仲間」、「ネットワーク」、「知識と技術」、「職場環境」などがあがった。

第4章は2つの調査結果に関する考察および全体的考察を行い、本研究の問題点および今後の課題を検討した。男性支援者を対象にした調査、継続研究、タイプ別のトラウマがもたらす二次受傷の影響、などを今後の課題として提案した。

最後に、第5章は調査結果を基に二次受傷予防プログラムを提示した。主な内容は、「専門知識を蓄える」「分かち合える仲間」「精神面の人間ドック」「バランスの取れた私生活」「安全な職場環境」「社会的な環境整備」である。

## 論文審査の結果の要旨

最近、我が国でも犯罪などの被害者支援活動が盛んになりつつあつが、それにともない支援者が被害者と同様の外傷性ストレス症状や燃え尽きなどの二次受傷を体験する例が報告されるようになった。本論文はこれまで欧米で行われた二次受傷研究のレビューを行い、次いで被害者支援団体の支援者を対象に質問紙調査を行い、さらに性犯罪被害者などに接している女性臨床家に面接調査を実施した。このようにして、本論文は二次受傷の実態を調査し、症状に影響を与える要因との関係を検討し、二次受傷からの回復および予防の可能性について、貴重な示唆を提供している。本論文は博士（人間科学）学位論文として十分に価値あるものと判定した。